交換と仮面 II

Mask and Exchage II (Notes on Freud)

加 茂 英 臣

Hideomi KAMO

はじめに

「自己の保存」という究極目標のために自分以外の全てを手段にして生きる主体を「プルーデント・マン」として追求してきた．この思慮<prudence＝Klugheit＝prévoyance>は，自己利益のために先を見通す能力として，近代では，(社会) 契約能力（ホッブズ・ロック)，社交能力（カント)，交換能力（スミス）などとして具象化された．これらはそれぞれ能力発揮の場面に応じて（法・広義の政治・経済）名は異なってはいるのだが，その実，近代人の条件として個人に割り振られた同一の能力に他ならなかった．この自己利益のために相互に他者を利用しあう能力を身につけて，個人は「近代市民」になることができるのである．その存在論的意味合いは，個体（個人）が唯一直接に存在する実在であるのに対して，共同（関係）とは個人同士が相互利用しあうかぎりで，その限りにおいてのみ存在しうる約束ごとでしかないという点である．自分にとって有用でなくなり，役立たなければ，関係（契約・社交・交換）は解消されてしまうということ，全体・関係（普遍）は複数個体が利害を通じて接触するかぎりで出現する構築物にすぎない，ということ．このような個体中心主義は，「ノミナリズム（普遍は個体より後なるもの)」と称され，近代の自由な個人と自由主義社会の存在論的条件となっているのである．

こうして，「市民社会（Civil Society＝Die Bürgerliche Gesellschaft」は，ヘーゲルによれば個々人の「欲望の体系（Das System der Bedürfnisse)」として現れることとなる．「市民社会においては，自分自身こそが各人にとって目的なのであって，その他いっさいのものはかれにとっては無意味でしかない．しかし各人は，他の人々と連関することなくしては，自分の諸目的の領域を達成することはできない．だからこれらの他人は，個々人の目的のための手段になる．したがって，他人の幸福をともに満足させることを通じて自分の幸福を満足させざるをえない．ということは，個々人の特定の目的は，他の人々との連関を通じて自分に普遍性の形式を与えるということにほかならない。」[①] このような相互利益の体系の内部に住まう住民は「プルーデンス」という自己支配の能力を身につけないと「市民」であることができない．それは契約能力（自己利益のために妥協する能力)，社交の能力（自分を他人に売りつける能力)，交換の能力であった．自分以外の他者をとにかく手段として用いる配慮の能力としての「プルーデンス」．市場の内部で生きる市民の条件である「プルーデンス」とはこのような意味で「市場の能力」にほかならない．

しかし，いくら市民社会に生きる条件が「市場の能力」を身につけることだとしても，具象的な生身の主体とはこのような「自己利益」を謀る能力に一元化されるものではない．この意味で，社会科学や哲学の多くは「主体」の像を非常に抽象化，一面化してきたといわざるをえない．「社会科学」の表街道で主役を演じつづけてきたこのような抽象的「主体」に対して，最近の異議申し立ての例を挙げておこう．

＜1　構造論的アプローチ　――スミスとマルクス

（市場のメカニズム）

近代社会科学の出発点に位置する著作としては，まず，アダム・スミスの『国富論』(一七七六年）をとりあげるべきでしょう．

近代社会の経済生活は発達した社会的分業を基礎としていること，ここからスミスの議論は始まります．その社会的分業の発達にともなって，職業における専門分化が進行して，人々は生産物を市場で交換するようになります．

この市場メカニズムにおいては，価格という記号化した非人格的な指標によって財の社会的交換と配分が行わ

れます．市場に登場する生産者・商人・消費者について観察してみると，本来彼らは一人一人，身分・職業的地位・思想・趣味などによって特徴づけられているはずですが，そうした社会的差異はすべて，市場メカニズムの特徴である徹底した非人格性・匿名性によって消し去られています．市場メカニズムの中で活動する経済人（ホモ・エコノミクス）にとっては，価格のみが手がかりなのです．

彼らは，自己の生産した財がどれほどの社会的評価を受けるかについては，市場にもちこんで実際にそれが売れるまでは，知ることができません．ここでは，生産者・商人・消費者を事前に差異化していた社会的属性は意味を失っており，市場における価格づけという事後的な評価だけが意味をもちます．社会的交換を決定するのは，非人格的・匿名的な記号としての価格であって，それを制作した人の倫理・道徳でもなければ，趣味や教養でもないのです．

（利己心への一元化）

このように，この場に登場する人物はすべて，社会的属性を剥奪され，「自分自身の利得」を目指し，「生産物が最大の価値をもつように」行為するという単純な利己主義的動機のみにもとづいて行為します．スミスは，市場経済のこうした非人格性．匿名性こそが，行為者の主観を超え，それとは切り離されたところで働く客観的社会機構を作り上げるのだと主張しました．近代社会科学は，この客観的な社会機構の仕組みを観察することによって，さらには，そこに働く作用を法則として認識することによって，初めて可能になる．そうスミスは言うのです．

……（中略）

こうして近代社会科学は，人間の行為動機を利己心という単純なレヴェルへと一元化しました．この一元化こそは客観的科学としての社会科学を成立させる条件だったのです．＞[②]

このような非人格的主体（ホモ・エコノミクス）は，スミスばかりではなくマルクスにも確実に受け継がれたのである．マルクスは，「自己利益」に一元化された主体，そのような意味で「超－道徳，超－倫理的」主体にまで抽象化された行為の主体を「経済学的範疇の人格化」と呼びかえただけなのであった．著者山之内は，スミス，マルクスをこのような方向で相対化しておいて，それに対してマックス・ウェーバーは理念・観念にしたがって行為する主体を重要視したという議論を，展開していくのであるが，当論文はそのような主体というものを考えるにあたってフロイトを追う．

I

前回の「交換と仮面」に指摘しておいたように，フロイト自身「快感原則より現実原則」という図式で考えていたことは，プラトンが「プロタゴラス」扁で記述した「プルーデンス」の原像の図式そのものであった．これは量や時間や因果関係のもとにその有用性を計量して自己の保存という見地より，快不快を統御する知の獲得を目指したものであった．こうして，快不快を統御する自我・主体が成立するのであるが，フロイト自身はこのプルーデンスーモデルとは全く別の主体形成の仕方をも立ち入って検討していた．「同一化（Identifizierung）」による主体形成というのがそれである．この概念に与えられている重要な襞のゆきとどいた把握のために，注として「集団心理学と自我の分析（S. Freud, Massenpsychlogie und Ich-Analyse, 1921）」からVII節「同一化（Identizifierung）」全体を引いて随時参照することにする。[③]

フロイトの理論は「リビドー」概念を駆使するものであるが，その「リビドーとは情動の理論から得た言葉である．われわれは量的な大きさとみなされたー今日なお，はかりがたいものであるがー衝動のエネルギーをこう呼んでいるが，それは愛として総称されるすべてのことに関係している．」と一般的に説明される。[④] このエネルギー量が，愛でありエロスに他ならず，何も特別なことを言っているわけではないとフロイトは語る．「愛」とは関係であり，感情であるから，冷めた表現をすれば，「感情結合（Gefühlsverbindung）」といいかえることができる．この結合は，エロス，愛，リビドーの主体が対象にむけて感情結合するという方向性を帯びているため，「対象選択（Objektwahl）」，「対象備給（Objektbesetzung）」などと言い換えられる．こうして感情結合，愛，エロスの主体は対象にリビドー・エネルギーを備給すればするほど自己に振り向けることのできるエネルギー量を喪失

していくことになる．その極限は「惚れ込み（Verliebtheit)」とよばれ，対象に愛のエネルギーの総量をつぎ込んだ状態となり，対象の意のままになる状態として，自我喪失意味する．また逆に，対象へ向けられたリビドー・エネルギーを自我に向けて撤収しきってしまうと，これは対象に興味を全くしめさない完璧な自惚れの主体としての自己中心的な＜ナルシシスト＞が出来上がってしまう．とにかく対象選択・対象備給としての愛は，自我を豊かにするものではないことは確かなことである．フロイトの卓抜なところは，この対象に向けての感情結合にたいして，これとは全く別の感情結合を「同一化（Identifizierung)」として対比させるところにある．

「……この種の対象備給が，他の人間との感情結合の唯一の方法を示しているかどうか，あるいは，なお他の感情結合の機制を考慮に入れるべきかどうか，ということも，われわれは知りたい．そして他の感情結合の機制とは，いわゆる同一化 Identifizierung がそれであるが，これはまだ充分知られてないし，叙述困難な過程である．そこで集団心理学の課題から，しばらく遠ざかることになるかもしれないが，いま，この過程を考察することにしよう。」[⑤] こうして対象備給とは全く別次元の感情結合として同一化が引き出される．以下，注に引いておいた「同一化」の章を参照していく．フロイトがこの議論を展開している，精神分析的観点に厳密に限定しなくても，この論点は主体一般の成り立ちという点に関して画期的な論点を提供するのである．

「同一化とは，他人にたいする感情結合のもっとも初期の現れとして，精神分析に知られている．そしてこれはエディプス・コンプレクス以前の生活史の中で，一つの役割を演じている．つまり幼い男の子が，父親にたいして特別の関心を現わすことがあるが，それは自分も父親とおなじようにありたいし，またそうなりたい，すべての点で父親のかわりになりたい，という関心である．客観的にいうと，彼は父親を理想にするのである．この態度は父親（そしてまた男性一般）にたいする受身的な，あるいは女性的な態度とはなんの関係もなく，むしろすぐれて男性的なものである．それは，よくエディプス・コンプレクスと調和していて，その準備をすすめるものである」(引用「同一化」のパラグラフ①全文)．「同一化」とは，幼い男の子が「自分も父親とおなじようにありたいし，またそうなりたい，すべての点で父親のかわりになりたい，という関心」に他ならず，それは「彼が父親を理想にする」こと以外のなにものでもないと語られているのである．(er möchte so werden und so sein wie er, in allen Stücken an seine Stelle treten. Sagen wir ruhig: er nimmt den Vater zu seinem Ideal.).

パラグラフ②で「この父親との同一化と同時に，おそらくはそれ以前にも，男児は，母親にたいする依存型の本格的な対象備給を向けはじめる．ここで，彼は二つの心理的に異なった結合を示す．すなわち，それは母親にたいする自然の性的な対象備給と，父親にたいする典型的な同一化である．この二つは，しばらくのあいだ互いに影響も妨害もなく並存するが，精神生活はたえず統一の度をつよめてゆく結果，これらはついに触れ合い，その合流によって，はじめて正常なエディプス・コンプレクスが成立する。」という母親に対する対象備給の説明が付け加わり「同一化」との関係と対比が浮き彫りにされる．

父親と「おなじようにありたい，そうなりたい，かわりになりたい」という「同一化」としての感情結合と，母親を「愛するという対象備給」との対比の論点は，次のことである．エロスのほうは，主体が「現実に存在する対象」に感情的に結合するのに対して，「同一化」においては，主体は，現実に存在する対象そのものではなく，その単なる「像（Bild)」に感情的に結合するという点である．さらに，この像を自分のうちへと「投影して（Introjektion)」従うべき自己像（理想像）とする過程までを含めて，＜同一化（Identizifieren)＞という出来事が完結することを指摘している．「Xと同じようにありたい，同じようになりたい，かわりになりたい，理想にする」という「同一化」において，主体は対象の存在にではなく，対象の単なる「像」に恋をして，これを自分のうちに取り込むというのである．パラグラフ④の説明がさらに続く．「このような，父親との同一化と，父親を相手にえらぶ対象選択との区別を，公式でいいあらわすことは容易である．最初の場合，父親は，そうありたいとおもうところのものであり，第二の場合，父親は持ちたいとおもうところのものである．それは，結合が自我の主体にかかわるか，あるいは，自我の客体にかかわるかの区別である．(Im ersten Falle ist der Vater das, was man sein, im zweiten das, was man haben möchte. Es ist also der Unterschied, ob die Bindung am Subjekt oder am Objekt des lchs angreift。)」というのがそれである．自我の主体に関る結合ということの含意は，他者（対象）の像であったものが自分の仮面となってしまう．他者の顔だったものが自分の顔になってしまうという事態を指しているのである．「同一化が，＜手本＞Vorbild とみなされた他我に似せて自我を形成しようと努力し

ていることはたしかである」ということで，「同一化」が，実は私が私になる仕組みとして，主体形成の基本的な原理であることが宣言されているのである．同一化とは，対象の「像」への恋であると同時に「ようにありたい，ようになりたい」像として「自己の像」を恋する営みなのである．これは，「対象愛」の直線的単純さに比べて主観に自己回帰する，反省的（reflexive）「感情結合」なのである．恋する相手が他者の「像」であり，また像であるがゆえにこの他者の「像」は憧れというカラクリを通じて「自己の像」になってしまうことができるのである．それは自己が被る「仮面」であるのにもかかわらず，それが本来の自分の「素顔」になってしまうという非合理な出来事である．他者の像を演ずることが自分を生きることになってしまうという，自己回帰的な不可思議な構造．これが「同一化」のもつある種の毒を含んだ魅力なのである．フロイト以外に誰がこのような危うく，また反主知主義，非合理な主体の成り立ちを語ることができようか．「プルーデンス」の単純で健康的・啓蒙的な主体の説明と比べて見ると，フロイトの真骨頂が理解されるというものである．私とは，実のところ他者の側から回帰することを通じて生成するものにすぎない，というのである⑥．

そしてパラグラフ⑩に，この点を最終的に敷衍して，「この同一化で目立つことは，その豊かさである．つまりそれは，自我を，きわめて重要な特徴をもったもの，つまり性的性質をもったものに，これまでの対象を手本にしてつくりかえる．そのさい対象そのものは放棄されるが，徹底的に放棄されるのか，それとも無意識には保たれているという意味で棄てられるのか，それはここでは論外である．棄てられたり，失われたりした対象のかわりに，その対象を自我に取り入れることは，けっして珍しいことではない．」と語られる．対象選択は対象は「持ちたい」ものとして対象の現実存在に固執する．その心理的帰結として，愛する対象が死んで存在しなくなれば，愛という感情結合が不可能となり，エネルギー備給を簡単に撤収することができず，当人は「メランコリー」という神経症に陥る可能性にさらされる．これにたいして「同一化」は原理的に対象の「像」に恋するのであるから，対象が存在しなくなっても，またはなから存在しない対象でも（たとえば騎士像に恋するドンキホーテ）その像が有りさえすれば可能な出来事なのであるのである．対象「愛」は対象の存在に固執する（対象を「持ちたいと思う」）．同一化は対象そのもの，あるいは対象の「存在」と捨て去る．このことのリビドー論的帰結とは，対象愛は対象にむけてリビドー・エネルギーを備給するので「自我を貧しくする」のにたいして，「同一化」は他者の存在は放棄するけれども，その放棄のと引き換えに対象の「像」を自己像として取り込むのであるから，逆にこれは自我を豊かにするといわれるのである．ここまでくるとこの「同一化」が，対象愛としての「エロス」にたいして，自己愛，「ナルシシズム」であることが判然としてくるのである．回帰的・反省的感情結合としてのこのナルシシズムは，幼児のときの第一次ナルシシズムとは後者の回帰性の構造によって区別されている．しかしこの反省的ナルシシズムは，幼いとき経験しその後不可避的に放棄を余儀なくされた主客未分のあの自体愛としてのナルシシズムの復権という意味を引きずっていることはまぎれのないことだと，フロイトは言うのである．仮面とは特定の誰かに固有なものではない．しかし仮面は不特定の誰によっても被られることができ，そしてそのひとに憑依して当人の人格を現象させる．私は他者からやってくる．私とは仮面である．　対象の＜Introjektion＞とは，対象の影，表象を＜愛するがゆえにあるいは憎むがゆえに＞私の内面へと投影することであって，現実に存在する対象そのものを取り入れることではない．

「棄てられたり，失われたりした対象のかわりに，その対象を自我に取り入れることは，けっして珍しいことではない．このような過程はしばしば小児について直接に観察される．最近，『国際精神分析学雑誌』の中に，このような観察が公にされたが，それによると子猫をなくして悲しんでいた子供が，自分はもう子猫になった，といいきって，四つ足であるき，テーブルにむかって食事をしようとしなくなった，とのことである．（⑩パラグラフの最後の部分）」この子の場合，愛していた現実の猫の突然の消失をリビドー的に受け入れることができず，その猫の像，影を取り入れて，猫そのものを演ずる，いや猫そのものになってしまっているというのである．

対象の「現実存在」を愛することはできても，対象の現実存在をそのまま取り込むことなどできはしない．内面に取り込むことができるものは，常に対象の「影」としての表象，像だけであって，対象の現実存在ではない．他者の現実の素顔ではなくその影，像，仮面であるがゆえに私はそれを内面化して自己の顔（像）にすることができるのである．

Ⅱ

「プルーデンス」の合理的主体と「同一化」の非合理な主体の決定的な違いを，主体化の場面を伝染病防止のために注射を甘受する幼児に求めてみる．注射は幼児にとって非常な苦痛と恐怖を与えることは間違いない．しかし何れ彼らは，敢えてその苦痛を甘受して自らすすんで（主体として）耐える時がくる．その甘受のしかたには二とおりある．「プルーデンス」の主体は，この苦痛を有用性のカテゴリーによって統御するであろう．彼は，「この前罹ったインフルエンザの苦痛」を想いだす．これに再び罹ることの苦痛と比べれば「現在の注射の苦痛」を耐えておいたほうが「よりよい（有意味＝有用）」という快苦の計算の結果，先を見通して（母親や看護婦や先生のそのような説得に応じてでもよい）注射を甘受するという経過を辿るであろう．この過程は合理的計算に基づいてなされるのであって，非合理な感情の支配は微塵も介在しない．これに対して，「同一化」の主体は，たとえば「自分はもう赤ちゃんではなくお兄さん・お姉さんなんだから」注射の苦痛くらいで崩れるのは「恥ずかしい，情けない」ことである（そのような説得に応ずるという経過を辿っても同じことであるが）という観点から，注射の苦痛を甘受することになる．プルーデンスだけの純粋主体があるとすればの話だが，彼にとっては損得・有用性の見地があるのみであって，恥ずかしいとか自分らしくないというような感情を持つことがない．それと同じく同一化の純粋主体は，有用性の見地で説得されてもそれに耳を貸すということは原理的にあり得ず，「自分であること」が崩れてしまわないことのほうを常に選択するであろう．しがし，通常の場合，この両方の主体のあり方に関与して，選択に迷うというのが具体的主体の在り方というものであろう．しかし純化して，このような主体化の二つの形態を抽出，検討することは今まで手がつけられることのなかった面白い作業であることは間違いない．これは，アイデンティティーを持った主体が同時に，市場の内部に生きる事の意味を問うことになるからである．

この幼児が，「お兄さん」あるいは「男の子」ということを根拠にして，注射の苦痛を甘受するのなら，この子はお兄さん・男の子の像を自己像として取り入れたことになる．その成功・不成功の主体にとっての意味とは，「役立つ・役立たない」ではなく，「誇らしい・情けない」という自尊感情である．プルーデンスの行為の意味づけは，何かのための手段行為として，常に将来（目的）に付託されてしまう（インフルエンザに罹らないために注射をする）．その都度の行為が幸福・不幸なのではない．それに対して，同一化による行為はその都度の行為の現在が幸福か不幸なのであり，その価値が未来に先送りされることがない．苦痛を甘受し注射をするという行程そのものに「お兄さん・男の子である」ことの誇りと陶酔が顕現するのである．苦痛の甘受そのものが陶酔と誇りである．この子が取り入れた像が，一次的な快不快の意味づけを変換してしまっているのだ．しかし，もし苦痛の恐怖に脅えて，注射に成功しなかった場合，この子は，自己に対する幻滅，自虐の不幸というものを思い知らなくてはならない．主体の観念ドラマが始まるのである．

「同一化」の主体は，取り入れた「自我理想（Ichideal）」と「現実」の「自我」とに分裂する．ここから，本来の自己像に従う事ができた場合，この主体は自由，自己実現の感情，ナルシシズムを生きることができるのだが，逆にそうできない場合には抑圧，落胆，絶望など「主体的であることの不可能」に晒されることにもなる．この「活き活きとできるか，崩れてしまうか」は，自分が被った仮面，取り込んだ自己像，能力，年齢，性別などの当人が抱えこんだその都度の条件や状況に依存する．自己像に現実の自我が追いつけない場合，ひとはその重圧に押しつぶされて神経症に陥ったり，投げ遣りな行為を起こす．このような危機は，主体が常に晒されている負の可能性であって，何も異質なできごとではない．

「同一化」のパラグラフ⑫は，同一化が自我を二つに分裂させること，そして取り入れた他者の像が「自我理想 Ichideal」となることがもたらす主体のドラマを要約して，この節の実質（「同一化」）を締めくくっている．

「……しかし，また苛酷におのれを扱うもう一つの部分も知られている．それは，良心，つまり平常でも自我にたいして批判的であるが，ふつうはそれほど苛酷で，不当ではない自我の中の批判的な機能に相当するものである．われわれは，すでに以前の機会に，自我にはこのような機能がつくられていて，それは別の自我から分離しつつ，この別の自我と葛藤におちいることがありうるのをみとめねばならなかった（自己愛，悲哀とメランコリー）われわれはそれを，＜自我理想＞Ichideal と名づけて，自己観察，道徳的良心，夢の検閲，抑圧のさいの主要な影

響力をその機能に帰した．それは，＜小児の自我が自己満足を得ていた根源的な自己愛の継承者(sie sei der Erbe des ursprünglichen Narzismus, in dem das kindliche lch sich selbst genügte)＞であることもすでに述べた．それはしだいに周囲からの影響によって，自我がかならずしもしたがうことのできない要求を引き受けては，それを自我に課するのであって，その結果，人間は自分の自我に満足することのできない場合でも，自我から分化された自我理想に満足を見出すことがゆるされる．」

ここで，「同一化」によって，現実の自我から「自我理想」が分離して対峙すること，しかもこの取り込まれた「自我理想」自体が「小児の自我が自己満足を得ていた根源的な自己愛の継承者(der Erbe des ursprünglichen Narziβmus, in dem das kindliche lch sich selbst genugte)」であることが断言されている．些か虚を衝かれる想いに駆られるが，この分離・分立が主体の自由感情，反省的ナルシシズムを可能にするというのである．同時にこの分立は，主体が不幸というもの感じることの観念的（反省的）原因ともなるのである．ナルシシズムを経験する事ができる可能性は，自己閉塞の不自由を経験する可能性を条件としてはじめて開かれるからである．このような自我を知らなければ，わたしは観念的（反省的）不幸など経験しなくてもよかったのだから（反省的幸・不幸ということで，一次的，生理的な快不快を超える，観念から生ずる自由・不自由を意味させている）．この分立の出来事によって，生理的主体，自己保存的主体を超えて，人間らしい自由な主体が生ずるのである．「プルーデンス」の主体が人間らしくないというのではない．あきらかに自分にとって有用性という見地から自己を反省（配慮）している．しかし，これは根っこの部分を「自己の保存」という生の一次性に置いているため，観念的に自由な主体の根拠にはなりえない．プルーデンスは，自己の存在・非存在を問題にすることが原理的に不可能である．＜仮面＞の主体は，自己の非存在を選択する可能性に開かれている．前者は妥協ということは知っているが自己の純粋な否定を知らないのである．そこにこの概念の生物学的，自然学的な出自が覗いている．

現実の自我は，自分の恋する自我理想に合致できるよう行為する．できたとき，この現実自我はその時点で自分に陶酔することができる．できないとき，理想自我からの抑圧を受ける，現実の自分を呪うことになる．「のようになりたい，のようでありたい」とは「成就」と「転落」，「ある」と「ない」，「希望」と「絶望」との狭間に揺らぐことを意味する．

最後に，次のような可能性を語ってこの節を閉じている．「……しかし，この自我理想（Ichideal）と実際の自我（Aktuelles Ich）との離反の程度は，個人によって非常に異なっていて，多くの人々にとっては，この自我の内部の分化は小児の場合の程度を越えてはいない．このことも，以前忘れずに付言しておいたとおりである。」このようなひとは，自由な主体になる可能性をもたない．観念的な不幸を知らずに済むかわりに反省的な幸福を味あうこともできないからである．ルソーの言うカライブ人が＜プルーデンス＞のもたらす幸不幸を知らないですんだように，自我理想を持たないひとは，観念的ドラマの幸不幸の舞台の外でナイーヴな生を送ることができるのである．およそこのような人は，取り替え不可能な個人として屹立すること，可能性を塞がれている．おそらくは自我理想が分立していない個体の内面の構造は，社会システムの運行そのものに同調して生きることができ，周囲の反応を見回すことから自分の在り方を生成させるという程度のものであろう．この自我理想と自我の分化には程度があるという考えは様々な思考を促す（たとえば柳田の発見した「常民」の内面構造への問いなど）．また「自我理想」は「超自我 ÜberIch」との関係の解明を要求するものである．しかし，いまは「同一視による主体化」というテーマに一つの纏まりを与えておきたい．

III

「同一化」による主体形成は，取り入れる像によってさまざまな形を取るばかりではなく，取り入れる主体が予め背負わされている客観的な条件によっても形が変わるという側面を無視するわけにはいかない．自尊感情は，自分の背負わされた枠，身体の条件・才能・能力・性別・年齢・人種などによって，相貌を変えるからである．取り入れる自己像は現実自我の客観的な条件に対応することによって主体に住み着くのである．この客観的条件の規制のために，場合によってはニーチェのいう「ルサンティマン（怨恨）」の主体のように，自虐的な生の形を余儀なくされる悲劇も起こるのである．自我理想を確立しながらも，あるいはそれをうちたてているがために，

現実の自分の側の条件との埋めがたい距離を発見してしまった場合，この主体はどのようにして自由を感ずることができるのであろうか．この二つの自我の距離，いわば二極の引力と斥力の関係によって，自由か屈折か絶望かが主体に訪れてくるのである．「同一化」の条件の考察は，ここまでくると「自我同一性（Identität)」，いわゆる「アイデンティティー」という概念の考察に接触する．エリクソンの「アイデンティティー論」はフロイトの「同一化」の議論の展開であるし，ラカンの「鏡像理論」もフロイトの「同一化」論の深化の試みなのである．

最近のベストセラーにBernhard Schlinkというドイツ人の「朗読者（Der Vorleser)」という小説がある．アウシュヴィッツで看守をしていたハンナという女性が，訴訟されて或る報告書を書いたか書かないかが有罪判決の決定的争点となる．彼女は「報告書を書いた，と自白して」無期懲役の判決を受ける．しかし彼女は実は文盲であったので，文字も読めなければ字もかけない．だから文字と接する機会を避け，また事あるごとに本の「朗読」を人に要求したのだ．自分の文盲の露顕に堪えがたい屈辱を感じていたのである．文盲であることを告白すれば，「報告書を書いた」という自白の虚偽が判明して，無罪あるいは罪の軽減を期待できるのに彼女は告白しなかった．いや，そのようなことを期待する以前に文盲であることの露顕自体を拒否していたのである．この本の核心となっている部分は，文盲という負の条件を不本意に課せられたハンナの心の闘争心，情熱にある．

このような記述がある．「そして，裁判の間も，文盲の露顕と犯罪者としての自白とを秤にかけていたわけじゃない．彼女には計算や策略はなかった．彼女は利益を追求したのではなく，自分にとっての真実と正義のために闘ったのだ．彼女はいつもちょっぴり自分を偽っていたし，完全に率直でもなく，自分を出そうともしなかったからそれはみすぼらしい正義ではあるのだが，それでも彼女自身の真実と正義であり，その戦いは彼女の闘いであった。」⑦ まず，ここには「プルーデンス」の主体と「同一視」の主体，打算と自尊の対立が描かれている．打算のために，自尊を犠牲に供さなかった．いやそのような比較を思いつくことさえなくして，文盲を隠しつづけたこと，その隠蔽することへの情熱と自由の発現を，「みすぼらしい正義」ではあるが「彼女自身の真実と正義」として価値づけている．しかしこの虚偽への情熱が説得性を持つのには条件が有る．自分ではどうしようもない文盲という不本意な欠陥，現実の自我に課せられた負の宿命，不当に強いられた負のアイデンティティーに対する否認の情熱だけが彼女を自由にするのである．ハンナの主体であることの全てがそこに懸かっているのである．そのような不当な強制に対して現実否認をする彼女の情熱，自由の発現，強いられた屈折の闘いが「彼女にとっての正義と真実の闘い」なのである．

人種，言語，障害，性別，能力や才能，など現実の主体を枠づけている制限と主体の自由の関係は「同一視」の主体のドラマに極めて複雑な襞を刻みこむ．この問題の展開は一応ここで打ち切る．フロイトのテキストの「同一視」という概念の理解と，その威力の評定を通して，「交換」に対置させた「仮面」という言葉で筆者がなにを構想しようとしているかを，まずは明らかにしておきたかった．

注

① 『法の哲学』第2章：市民社会§182「追加」(世界の名著『ヘーゲル』：訳は分かり易さを求めて筆者によって改変)(Grundlinien der Philosophie des Rechts. S. 339-340, Werke 7. Suhrkamp 1996)

② （山之内　靖：『マックス・ウェーバー入門』，P.9-12，岩波新書，1997）

③

「VII　同一化

①　同一化とは，他人にたいする感情結合のもっとも初期の現れとして，精神分析に知られている．そしてこれはエディプス・コンプレクス以前の生活史の中で，一つの役割を演じている．つまり幼い男の子が，父親にたいして特別の関心を現わすことがあるが，それは自分も父親とおなじようにありたいし，またそうなりたい，すべての点で父親のかわりになりたい，という関心である．客観的にいうと，彼は父親を理想にするのである．この態度は父親(そしてまた男性一般)にたいする受身的な，あるいは女性的な態度とはなんの関係もなく，むしろすぐれて男性的なものである．それは，よくエディプス・コンプレクスと調和していて，その準備をすすめるものである．

② この父親との同一化と同時に，おそらくはそれ以前にも，男児は，母親にたいする依存型の本格的な対象備給を向けはじめる．ここで，彼は二つの心理的に異なった結合を示す．すなわち，それは母親にたいする自然の性的な対象備給と，父親にたいする典型的な同一化である．この二つは，しばらくのあいだ互いに影響も妨害もなく並存するが，精神生活はたえず統一の度をつよめてゆく結果，これらはついに触れ合い，その合流によって，はじめて正常なエディプス・コンプレクスが成立する．子供は，父親が母親の傍にいて自分の邪魔をしているのに気づく．彼の父親との同一化は，いまは敵意のある調子をおびてきて，母親にたいして父親のかわりになりたいという願望とひとしいものになってゆく．同一化には，まさしく最初からアンビヴァレント面があって，それは情愛の表現にも，排除の願望にもなりうるのである．同一化は，リビドー体制の最初の口愛期の流れを汲んでいるのであって，渇望し尊重する対象にこれを食べてしまうことによって同化し，また，そのようにして対象を滅ぼしてしまう．そして食人種がこの立場にとどまっていることは知られているが，彼は自分の敵を食いつくしてしまいたいほど愛しているのであって，どうしても愛することのできないような敵は食いつくそうともしない。[1]

③　この父親との同一化の運命は，のちになると見失われやすい．エディプス・コンプレクスが逆になり，父親が女性的態度の対象になって，そこに直接的な性的衝動の充足が期待されるかもしれないがこの場合には，父親との同一化は父親との対象結合の先駆になってしまう．同様のことが，幼い女児についても母親とのあいだに行なわれる．

④　このような，父親との同一化と，父親を相手にえらぶ対象選択との区別を，公式でいいあらわすことは容易である．最初の場合，父親は，そうありたいとおもうところのものであり，第二の場合，父親は持ちたいとおもうところのものである．それは，結合が自我の主体にかかわるか，あるいは，自我の客体にかかわるかの区別である．それゆえ前者はあらゆる性的な対象選択以前に可能である．この区別を，メタサイコロジイ的に，具象化して叙述することは，きわめて困難である．ただ，同一化が，「手本」Vorbild とみなされた他我に似せて自我を形成しようと努力していることだけはたしかである．

⑤　さらにこの錯綜した関係の中から，神経症症状の形成されるさいの同一化をとり出してみよう．いまここでは，幼い少女を例にとってみようとおもうが，彼女は母親とおなじ苦痛な症状，たとえば母親とおなじような苦しげな咳になやむとしよう．この症状は，さまざまな起こり方をする．つまり，この同一化が，敵意に駆られて母親のかわりをしようとする欲求を意味するエディプス・コンプレクスから生まれた同一化であってその症状は父親への対象愛を表現していることもある．それは，罪意識，つまり「お前は母親になろうと思った以上，今はせめて苦しむのだ」という罪意識の影響のもとで母親の身がわりをするのである．これはヒステリー症状形成の完全な機制である．また一方で，その症状は愛している人の症状と同じ場合もある（たとえば『あるヒステリー患者の分析の断片』（本著作集第間五巻所収・訳者）の中のドラが父親の咳をまねるように）．そこでわれわれは，この間の事情を次のように，述べることができよう．同一化は対象選択のかわりに，現われ，対象選択は同一化に退行した，と．同一化は前記のように，感情結合のもっとも初期のもっとも根源的な形式である．そして症状形成や，したがって抑圧や無意識の機制が支配する条件のもとでは，対象選択がふたたび同一化になり，このようにして自我が対象の特性を身につけることはよく起こるのである．自我が，この同一化のさいに，ときには好まない人物を，また，ときには愛する人物を模写することは注目に値する．両方の場合はいずれもこの同一化は部分的で，極度に制限されたものであり，対象人物の一つの特色だけを借りていることも，われわれの注意をひくにちがいない．

⑥　症状形成の第三の，とくにひんぱんで重要な実例は，同一化が模写した人物との対象関係をまったく度外視する場合である．たとえば寄宿舎の一人の少女が秘密の恋人から手紙を受けとり，その手紙が彼女の嫉妬を刺激した結果，ヒステリーの発作で反応するとき，それを知った彼女の二，三の女友達は，いわば心理的伝染によっておなじ発作を起こすだろう．この機制は，おなじ状態に身を置く能力，または置こうとする欲求にもとづく同一化の機制である．その女友達も秘密の恋愛関係をもちたいとおもい，罪意識の中で，その恋愛につきまとう苦悩をも引き受けるのである．彼女たちは同情からその症状を自分たちのものにしているのだ，と主張することは正しくないだろう．その反対に，同情は，同一化によって生まれる．その証拠に，このような伝染ないし模倣は，

寄宿生の場合よりも，相互のあいだに，ずっとわずかしか一時の共感があるにすぎない事情の中でも行なわれるからである．一人の自我が，他人の自我にある点で重要な類似をみつけたとき，われわれの例でいえば，同様な感情を用意している点で意味ぶかい類似をみとめたとき，それにつづいてこの点で同一化が形成される．そして，病的な事情の影響下では，この同一化は，一人の自我が創りだした症状にまでおよぶのである．このようにして，症状を通しての同一化は，二つの自我の重複地帯たいする目じるしとなるが，この地帯は抑圧されていなければならないものである．

⑦　われわれは，この三つの源泉から学んだことを，次のように，要約することができよう．第一に，同一化は対象にたいする感情結合の根源的な形式であり，第二に，退行の道をたどって，同一化は，いわば対象を自我に取り入れることによって，リビドー的対象結合の代用物になり，第三に，同一化は性的衝動の対象ではない他人との，あらたにみつけた共通点のあるたびごとに，生じうることである．この共通性が，重大なものであればあるほど，この部分的な同一化は，ますます効果のあるものになるにちがいなく，また，それは新しい結合の端緒にふさわしいものになるにちがいない．

⑧　すでに予感されていることであるが，集団の中の個人相互の結合は，重大な情緒的な共通性のために，上記の同一化の性質をもっているのであって，この共通性は指導者への結合のあり方によると推測することができよう．もう一つの予感がある．それは，われわれがまだまだ同一化の問題を論じつくしていないこと，われわれは心理学が「感情移入」Einfühlungとよんでいる過程に当面していて，この過程は自我に縁遠い他人のもつものを理解するのに一番大きな役割を果たすということである．しかし，われわれはここでは，さしあたり同一化の情緒的作用に局限して考えて，知的生活にたいする意義は除外することにしよう．

⑨　精神分析的な研究は，ときとして精神病のような困難な問題に取り組んだこともあるが，その結果同一化には，ただちに理解のおよばない，二，三の他の場合のあることが明らかになった．ここで私は，そのうちの二つの場合を，さらに進んだ考察の材料として，詳細に取り扱ってみよう．

⑩　男性の同性愛の発生は，大まかに述べてみると，次のようになる．(『レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期のある思い出』＜1910年＞を参照・訳者)．若い男はエディプス・コンプレクスの意味で，彼の母親に長いあいだつよく固着している．けれども思春期が完了したのち，ついに母親を他の性的対象と取りかえる時期がくる．そのさい，突然の方向転換が起こる．若者は母親を捨てないで自分を母親と同一化して，彼女の中に自分を転化しいまや彼の自我の代理となるような対象を求め，その対象を彼が母親から経験したように，愛し世話するのである．これは，しばしば起こる過程であって，時に応じて，たしかめることができるし，それは，この突然の方向転換をひきおこす生物的な衝動力や，その動機に関するどんな仮説とも関係なく起こるのである．この同一化で目立つことは，その豊かさである．つまりそれは，自我を，きわめて重要な特徴をもったもの，つまり性的性質をもったものに，これまでの対象を手本にしてつくりかえる．そのさい対象そのものは放棄されるが，徹底的に放棄されるのか，それとも無意識には保たれているという意味で棄てられるのか，それはここでは論外である．棄てられたり，失われたりした対象のかわりに，その対象を自我に取り入れることは，けっして珍しいことではない．このような過程はしばしば小児について直接に観察される．最近，『国際精神分析学雑誌』の中に，このような観察が公にされたが，それによると子猫をなくして悲しんでいた子供が，自分はもう子猫になった，といいきって，四つ足であるき，テーブルにむかって食事をしようとしなくなった，とのことである。[2]

⑪　対象の，このような取り入れに関するもう一つの例は，メランコリー（鬱病）の分析から得られたが，この病気は愛する対象が実際に失われることや，情緒的な意味で失われることが，そのもっとも顕著な機縁にかぞえられている．このような場合の，おもな特徴は，仮借なき自己批判や苛酷な自己非難につらなる，自我の残酷な自己蔑視である．分析に，よって明らかになったことは，このような評価と，このような非難は，根本的には対象に向けられていて，対象への自我の復讐を現わしているのである．つまり対象の影が，自我のうえに落ちるのだ，と私は他の箇所で述べておいた．対象の取り入れは，ここでは，まごうかたなく明白である。[3]

⑫　しかし，このメランコリーは，なおもっと別のことを示している．それは後述の考察にとって重要になることであるが，自我が二つの部分に割かれて，その中の一方が他方に暴威をふるうことである．この他の部分とは，取り入れて変化したものであって失われた対象をふくんでいる．しかし，また苛酷におのれを扱うもう一つの部

分も知られている．それは，良心，つまり平常でも自我にたいして批判的であるが，ふつうはそれほど苛酷で，不当ではない自我の中の批判的な機能に相当するものである．われわれは，すでに以前の機会に，自我にはこのような機能がつくられていて，それは他の自我から分離しつつ，他の自我と葛藤におちいることがありうるのをみとめねばならなかった（自己愛，悲哀とメランコリー）われわれはそれを，「自我理想」Ichidealと名づけて，自己観察，道徳的良心，夢の検閲，抑圧のさいの主要な影響力をその機能に帰した．それは，小児の自我が自己満足を得ている根源的な自己愛の継承者であることもすでに述べた．それはしだいに周囲からの影響によって，自我がかならずしもしたがうことのできない要求を引き受けては，それを自我に課するのであって，その結果，人間は自分の自我に満足することのできない場合でも，自我から分化された自我理想に満足を見出すことがゆるされる．この機能の破綻は，妄想の場合に明確にみとめられたが，そのさい，この崩壊の由来は，権威の影響ことに両親の影響にあることが見出された。[4] しかし，この自我理想と実際の自我との離反の程度は，個人によって非常に異なっていて，多くの人々にとっては，この自我の内部の分化は小児の場合の程度を越えてはいない．このことも，以前忘れずに付言しておいたとおりである．

⑬　しかし，集団のリビドー的組織を理解するためにこの資料を応用するに先立って，われわれは，対象と自我とのあいだの二，三の別の相互関係を考察しなければならない。[5]

(1)　『性欲論三篇』〔本著作集第五巻所収〕とアブラハムの『リビドーのもっとも早期の前性器的な発達段階に関する研究』，『国際精神分析学雑誌』一九一五年，を見よ．また，同書『精神分析への臨床的寄与』，『国際精神分析学雑誌』第十巻，一九二一年も参照せよ．

(2)　マルクツェヴィッチ『小児における自閉的思考についての寄与』『国際精神分析学雑誌』第六号，一九二〇年．

(3)　『悲哀とメランコリー』『神経症学小論集』第四集，一九一八年．

(4)　『ナルシシズム入門』〔本著作集第五巻所収〕参照．

(5)　われわれは，病態からとったこの実例によっては，同一化の本質をつくしていないし，それによって，集団形成の謎の一部分を触れないままにのこしていることをよく知っている．ここでは，はるかに根本的で，さらに包括的な，心理的分析が行なわれなければならないであろう．同一化から，道は模倣を経て感情移入へ，つまりそれによって，一般に他人の精神生活にたいする態度が可能にされるゆえんの，機制の理解へと通じている．そしてまた現に現われている同一化という現象にも，なお多くのことが説明されねばならない．それは人が自分と同一化している人物にたいする攻撃を制限し，その人物をいたわり，彼を助けるという結果をもたらしている．このような同一化，たとえば氏族社会の根抵に見られるような同一化の研究は，ロバートソン・スミスによって，この同一化は共通の物体を認めることに由来し（『血族と結婚』一八八五年），したがって，それは食事を一緒にすることによってもつくられうる，という驚くべき結論をもたらしたのである．このような特色があるからこそ，この種の同一化を私が『トーテムとタブー』で構成した，人間の家族の原始時代の歴史とむすびつけて考えることがゆるされるのである。」

（注に引用した＜Identizifierung＞の訳に関しては，上記訳書は「同一視」でとしている．しかし本論文では原語＜Identizifierung＞そのままに「同一化」という訳に変えてとおしている．本論の内容に明らかなように，この概念は，「視：みなす」のではなく文字どおり当のものに「化する」という点を意図して狙っていると考えられるからである．なお，パラグラフごとに付けた一連番号は筆者による．また訳書の注の位置づけと番号づけは，当論文の体裁の合わせて筆者が変更を加えている．また，本文でドイツ語原文を利用する場合は，次のテキストを利用して該当箇所を引用する．Sigmund Freud, Massenpsychologie und Ich-Analyse／Die Zukunft einer Illusion, Fischer Taschenbuch Verlag. 1997）

④　「集団心理学と自我の分析」IV　暗示とリビドー『フロイト著作集6』P.211人文書院）

⑤　「集団心理学と自我の分析」VI「次に続く課題と研究の方向」（『フロイト著作集6』P.221，人文書院）

⑥　同一化による主体化というテーマに関しては，「ミメーシス（模倣）」として古くより考察の蓄積がある．たとえばプラトンは『国家』扁，第三巻の中で（395C-396B）で，「模倣する」ことにプラトン固有の意味づけを試みている．まずは，教育論的観点より，ミメーシスの価値はは相対化されている．いまだロゴス的思考が不可能な子供

たちにその感性的代替物として利用される．ロゴスが実在をきわめることができるのたいして，ミメーシスは模造・影・コピーを映すにすぎないからである．しかし同時に，ミメーシスのもつ無気味さについては非常に警戒している．「真似（ta mimeseis）というものは，若いときからあまりつづけていると，身体の面でも，精神的な面でも，その人の在り方（ethos）や本姓（physis）のなかへに座を占めてしまう（395D）」．興味深いテキストである，また現代では，ロジェ・カイヨワの『遊びと人間（Les jeux et les hommes）』のなかの，ミメーシス（mimicry）の考察が本論の見地からは興味深い．いずれ立ち入って論ずる．

⑦　ベルンハルト・シュリンク『朗読者』，128頁（松永美穂訳，新潮社・2000年）